

男鹿真山伝承館：実演 開始挨拶（１）

本日は男鹿真山伝承館へのご来館ありがとうございます。真山地方のなまはげを実際に見る前に、なまはげとは何かをガイドから手短かに説明いたします。

なまはげは、男鹿の山の神々の使いと考えられています。大晦日の夜に近隣の村の家を一軒ずつまわり、邪悪と不純を追い払い、豊穰または豊漁の恵みを分け与え、来る年の健康と家内安全をもたらします。また、何世代も伝承されてきた地元の儀式で、怠け者とやんちゃ者に罰を与えます。

なまはげという言葉はナモミという言葉に由来しています。ナモミは男鹿地方の方言で、手や足に発生する低温火傷痕である「温熱性紅斑」を意味していました。ほとんどの時間を屋内の囲炉裏にあたって過ごした怠け者に、この水ぶくれが発生しました。この言葉が成立した後、ナモミハギという言葉ができました。怠け癖がバレてしまうこの火傷痕を取り除く（より文字通り表現するなら「剥ぎ取る」）ことを意味する言葉でした。ナモミハギは最終的になまはげに短縮され、この言葉は、神の使いそのものと、少なくとも 19 世紀の初頭から男鹿で毎年行われている儀式の両方を指すようになりました。

なまはげは歴史的には、新年最初の満月を祝う祭りの小正月（「小さな正月」）の夜に出現していました。これは、太陰暦に基づく旧暦の 1 月 15 日にあたり、今日では大体 2 月中旬になります。日本が 1873 年にグレゴリオ暦を導入してからは、なまはげもこの新たな暦に合わせる必要に迫られました。今日ではなまはげは男鹿の村を 12 月 31 日に訪問します。

男鹿には約 140 の村がありますが、その中で 90 ほどの村に独自のなまはげの伝統が伝わっており、それぞれ神の使いの外見、振る舞い、所有物が異なります。ここ真山では、なまはげは道具や武器を持たず、またその他のほとんどの村と違って仮面にはツノがありません。家々を周るなまはげ一行の人数も、地域によって異なります。真山では 3 人で、うち 2 人はなまはげ、残る 1 人は人間の使い人です。使い人には、一行の到着を先に知らせる役目があります。

民家に到着すると、使い人がまず中に入り、なまはげが入っていいかどうかを住人に尋ねます。過去 1 年に子供が生まれた家や家族が亡くなった家には入らないのが、なまはげの風習となっています。